

エコツーリズムから持続可能な観光へ

エコツーリズムとは、地域の自然環境や歴史文化などの魅力を観光客に伝えることで、その価値が理解され、保全につながることを目指したツーリズムです。エコツーリズムは自然環境の保全だけでなく、地域にふながりをつくり、持続可能な観光や社会へと転換していくことにもつながっています。



北海道知床でのガイドツアー

エコツーリズムの 現在とエコツアー

エコツーリズム、この言葉が1990年代に国内で普及し始めてから、30年近くが経過しました。

当初、「環境にやさしい観光」という注釈が付いていたのですが、現在はエコツーリズムというだけで、何となくイメージしてもらえようになっています。また観光関係者にとっても、地域にある自然を活用して、オプションツアーや滞在型観光を充実させるコンテンツとして期待されています。

世界自然遺産に登録された北海道の知床半島や鹿児島県の屋久島では、ガイドが同行するツアーが

普及しています。情報源がガイドブックからインターネットに変わった現在でも、リアルなガイドの語り的魅力に魅了され、旅先で満足感を得る観光客は多くいます。

知床半島を訪れる観光客は、ヒグマなどの野生生物をぜひ見たいと思っていますが、単にヒグマを見るだけなら、知床半島でなくてもよいはず。生態系とヒグマとの関係や、海域と陸域の生態学的なつながりのダイナミズムを、ガイドが身近な自然から解説することで、魅力ある滞在にしているのです。

しかし、世界自然遺産地域以外の実態を見ると、エコツーリズムやエコツアーは、まだまだ身近な

北陸先端科学技術大学院大学
教授
敷田麻実

観光スタイルとはなっていない。例えば、2014年に行われた「環境問題に関する世論調査（内閣府）」では、56%が「エコツーリズム」という言葉を聞いたこともない」と回答していました。さらに、実際のエコツアー参加率は4%にすぎません。もっとも、同調査では重要な「生物多様性」についても52%が知らないと回答しているので、エコツーリズムに対する関心が特別に低いと断定することはできないでしょう。

また、興味深いのは「参加してみたいエコツアーは何か」についての設問で、歴史文化の解説を受けるツアーが44%に達し、原生的な自然観察の34%より関心が高かつ

たことです。このように、一般人にとって、エコツアーとは、観光地で自然や歴史を問わず、ガイドが付いて地域を体験するというイメージなのです。

しかし国内には、自然環境と一体となった豊かな地域文化があり、それが優れた観光資源になります。そこで、こうした理解自体を批判するのではなく、エコツアーは、観光体験から学ぶことを目的とした、新しいスタイルの観光だと肯定的に受け入れてはどうでしょうか。

その一方でエコツアーは、環境学習や地域学習の要素を持つ観光地での体験活動であると認識されています。また、ガイドが同行しますので、自然環境や地域社会への配慮が行き届き、結果的に観光の影響が低減できると考えられています。

さらに現在は、エコツアーのような環境に配慮したツアーに参加すること自体が、観光客にとってのステータスとなり、付加価値の高いツアーや体験観光に参加したという満足感を得られるようになってきました。このように、自然環境の保護や保全を目指して生まれ

たエコツアーは、消費者によって新たな意味が生成され始めているのです。

ニーズに応えつつ 自然環境保全

豊かな自然環境に恵まれた地域であつても、また、であればこそ、地域外の観光事業者によるリゾー

ト開発や大規模開発によって自然環境が破壊されてきました。マストリーズムは経営効率優先の観光スタイルであり、発地である先進国や都市側の事業者が、大きな利益を得ます。その反面、観光地の住民や地域関係者にとっては、地域資源を利用されただけに終わることが各地で起きました。資源を

利用したことで生み出される観光からの利益が、地域に還元されることがなかったのです。

その反省から、1980年代に生まれたエコツーリズムでは、観光客が自然を楽しむ（鑑賞する）だけではなく、途上国や地域側が、観光を通して自らの利益確保を目指そうとしたのです。国際エコツーリズム協会（The International Ecotourism Society）も「エコツアーを「自然環境を保全し、地元住民の福利の向上と教育や解説につながる、自然地域での責任ある旅行」と説明しています。

しかし、こうした「エコツーリズム性善説」への期待に反して、近年普及したエコツーリズムには課題も多くあります。最大の課題は、地域側が今まで効果的に使えなかった自然資源の価値を説明することの難しさです。地域の自然をかたくなに守る「保護」であれば、まったく利用させないという選択ができます。つまり何もしなくてもよいのです。しかしエコツアーでは、地域の自然環境の持つ価値を説明し、観光客が満足する価値を生み出すことを求められました。つまり地域側に「ブランディ



エコツアーで環境学習（北海道釧路市阿寒湖）



豊かな自然は地域の資産（北海道浜中町霧多布湿原）

ング」や「マーケティング」が求められたのです。実際には、消費者である観光客のニーズに添えて、旅行商品であるエコツアーを提供することです。しかし、誰が考えてもわかるように、それは簡単ではありません。特に、それを継続的に、事業として経営していくことは、至難の業だったのです。

一方、自然環境はある意味で地域の共有物です。それを利用してツアーを行い、利益を得ていくことについて、地域関係者や、これからの世代への配慮も必要でしょう。自然環境をエコツアーで消費させる、「売り物」にすることは、たとえエコツアー自体のインパクトが少なくとはいえ、リスクがあります。例えば、エコツーリストが増加した場合、現場のインパクトマネジメントは難しくなります。世界自然遺産である知床半島や屋久島の例を見れば、それは明白です。しかし観光事業の採算性のためには、規模の拡大はある程度必要です。そのため消費者のリクエストに添えていると、大切な自然環境を損なうという結果になってしまいがちです。

エコツーリズムから地域再生へ

前述した課題はありながらも、地域でエコツーリズムが推進されているのは、やはり従来の観光とは違う魅力を持っているからです。観光は複合産業で、地域資源を効果的に活用して利益を生み出していきます。つまり、自然環境からの「コンテンツの生産能力」を向上させることにつながるのです。そこには「ビジネス」も成立しますが、一方で、観光客の喜びや満足などの「ハピネス」や生活の質も含めた健康である「ウェルネス」も生まれます。

また、エコツアーを実現するためには、地域の自然環境をよく知り、その保全を心がける必要があります。それは地域にある自然環境という「資産」の再評価につながり、そこから、自分たちの地域には素晴らしいものがあると自覚できます。そして、それを地域外の観光客が評価することが「地域のプライド」や「誇りの醸成」につながります。それが地域社会の再生を意味付けていくのです。

さらに、エコツアー現場で考え

でもメリットは多くあります。自然環境をエコツアーで効果的に使うためには、ブランディングを考えますので、地域にある自然環境の客観的価値や素晴らしさに気が付きます。エコツアーガイドの育成や雇用は、地域の人材育成と雇用創出になります。マストアーへの反省から、経済的な利益を求めることに否定的な考え方もあるかもしれませんが、身近にある資源を活用して利益を得ることは、地域関係者にとっての創意工夫の機会です。

このように、地域経済の活性化だけではなく、総合的な地域政策となる可能性をエコツーリズムの推進は内包しています。そして、観光にかかわる関係者は多様なので、エコツアーづくりや資源となる自然環境の保全のために、地域内外の多様な主体が連携することができ、それがコミュニティの中で新たな結びつきや関係性をつくってゆくのです。確かに商店街再生などの地域再生活動なども優れていますが、多様な主体がかかわることができる、観光という親しみがある活動なので抵抗が少ないなど、「エコツアーという観光」

の持つ特性を生かすことができます。

つまりエコツーリズムは、地域の自然環境を効果的に活用する優れた「地域資源戦略」だと考えられます。エコツアーの実施を通してそれに気づくことが、エコツーリズムの最大のメリットでしょう。

自然環境への再投資で持続可能な観光へ

エコツーリズムを推進することのメリットについて解説しましたが、そのメリットが持続できることが持続可能性です。観光からメリットを得られれば、自然環境や地域に多少の影響が出ても仕方ないという効率優先の考え方や短期的な利益の追求は、持続可能ではありません。

では、逆に保全のためには自然環境の利用を「がまん」し、保護すればよいのでしょうか。環境保全関係者からは、手付かずの自然を守る、また観光による利用は自然を破壊するという環境保全関係者の意見があることは承知しています。もちろんエコツーリズムの推進は「免罪符」ではありません。

エコツアーだからといって、自然環境へのインパクトマネジメントを甘くしてはいけません。しかし、地域関係者が、地域資源としての自然環境を創意工夫して使うことは、地域資源に関する主権や地域の主体性の点からは重要なことです。

そして最も重要なことは、自然環境を使うこと自体ではなく、使った自然環境と地域への、観光による利益の還元です。この利益の還元とは、観光から得られた経済的利益を使って自然環境を保全し、地域の「資産」を充実させることです。また、地域の人材育成など、地域資産を効果的に使うための能力を向上させることも重要です。還元は地域や自然環境への再投資と考えることもできます。つまり、手付かずの自然を守る保護から、自然環境への再投資を前提とした保全へ移行できるのがエコツーリズムなのです。

実例を挙げたいと思います。北海道浜中町のNPO法人「霧多布湿原トラスト」は、日本第3位の広さの湿原を利用したエコツアーを実施し、その利益や寄付金を使って湿原の土地購入による保全を進

めています。購入面積は全湿地3168haの30%にもおよび、その湿地を保全することで、より満足度の高いエコツアーが実施できるという好循環が生まれるのです。

エコツーリズムは、地域の自然を守れば地域は豊かになると考えていた従来の考え方から、地域が主体となって考えて、地域資源の活用を工夫してゆく、社会も自然も持続可能な観光への転換です。

それは知床半島や屋久島などの世界自然遺産地域だけではなく、里山などの身近にある自然、さらには地域文化を対象としても実現可能です。2017年は「持続可能な観光国際年」です。エコツーリズムから持続可能な観光への転換は、エコツーリズムだけに求められるわけではありません。観光の意味を見直すきっかけとしてこの年が記憶されるのではないのでしょうか。

自然環境への再投資が持続可能性につながる

【参考文献】

敷田麻実ほか『地域資源を守っていかすエコツーリズム—人と自然の共生システム』（講談社、2011）
敷田麻実「誕生から30年を経たエコツーリズムの可能性」（『環境会議』2016秋号）

